

日蓮大聖人御書全集

うえのどのごしよ

上野殿御書

しちろうごろうしきよ こと

（七郎五郎死去の事）

新版
1903
〜
1904

うえのどのごしよ しろろごろうしきよ こと

上野殿御書（七郎五郎死去の事）

こうあん ねん

がつ にち

さい

なんじようときみつ

弘安3年（'80）9月6日

59歳

南条時光

なんじようのしろろごろうどの

ごしきよ

おんこと

ひと

う

し

南条七郎五郎殿の御死去の御事、人は生まれて死する

習

ちしや

ぐしや

じようげいちどう

し

そうら

はじ

ならいとは、智者も愚者も上下一同に知って候えば、始め

歎

驚

覚

由

われ

ぞん

ひと

てなげくべしおどろくべしとはおぼえぬよし、我も存じ、人

教

そうら

とき

当

夢

幻

にもおしえ候えども、時にあたりて、ゆめかまぼろしか、

弁

そうらう

はは

歎

いまだわきまえがたく候。まして、母のいかんがなげか

そうらう

れ候らん。

ふぼ

きようだい

遅

果

愛

夫

過

父母にも兄弟にもおくれはてて、いとおしきおとこにす

別

ぎわかれたりしかども、子どもあまたおわしませば、心

慰

なぐさみてこそおわしつらん。いとおしきてごご、しかも

男子

見目形

ひと

勝

こころ

見

おのこご。みめかたちも人にすぐれ、心もかいがいしくみ

ひとびと

清

見そうら

えしかば、よその人々もすすしくこそみ候いしに、あやな

蕾

はな

かぜ

萎

まんげつ

俄

う

く、つぼめる花の風にしぼみ、満月のにわか失せたるが

思

真

覚

そうら

書

ごとくこそおぼすらめ。まこととおぼえ候わねば、かき

付

覚

そうら

もう

きょうきょう

つくるそらもおぼえ候わず。またまた申すべし。恐々

きんげん

謹言。

こうあんさんねんくがつむいか

弘安三年九月六日

にちれん

日蓮

かおう

花押

うえのどのごへんじ

上野殿御返事

お　　もう

追つて申す。

ろくがつじゅうごにち　　みたてまつ　　そうら

きも

この六月十五日に見奉り候いしに、「あわれ、肝あ

もの　　おとこ　　おとこ

み　そうら

み　そうら

る者かな。男や、男や」と見候いしに、また見候わざ

悲

そうら

そうら

しやかぶつ

らんことこそかなしくは候え。さは候えども、釈迦仏・

ほけきよう　　み　　い　　そうら

りんじゅう

そうら

法華經に身を入れて候いしかば、臨終めでたく候いけり。

こころ　　ちちぎみ　　いつしよ　　りようぜんじようど　　まい

て　　取　　こうべ　　あ

心は父君と一所に靈山浄土に参りて、手を取り頭を合わ

よろこ　　そうろう

せてこそ悦ばれ候らめ。あわれなり、あわれなり。